

# 呉竹丸遭難記

赤崎 克巳

呉竹丸（総トン数五、一五七トン）が、ボルネオ島バリックパパン港沖でオランダ艦艇により撃沈されたのは、太平洋戦争の緒戦の昭和十七年一月二十四日のことでした。

私が、はじめて呉竹丸に乗船したときの印象は、かなりのポロ船で、グレーの船体もひどく汚れて、船じゅうが到る所赤く染まっていたのは、主としてこの船が鉱石を運んでいたからなのでしょう。

もともとこの船は、英国船籍であったのをいつ頃か買船したものだときいていたが、あとでこの船の元の船名がベニシヤ号であったことを、ストアーの中の頑丈な鉄箱の表面に書かれてあるのを見て、なるほどと思つたものでした。船内もパッセージなどいつも薄暗く、採光の悪い船室の床のリノリウムが、ひどくすりきれていたので覚えています。それでも、サロン職員の部屋はそれなりに立派でした。特にサロン食堂は適当な明るさの中であつしりとした檜木の椅子がざらりと並び、すべての調度品がマホガニー色で統一されたどしりとしたたずまいで、英国風の雰囲気が充分でした。呉竹なんて変な名だなあと思つて聞いたら、「ウン、社長のヒイキの芸者の名だよ」とまことしやかに教えてくれた先輩もいたが、ほんとうはオソレオオクモ宮中の御殿の名だとかで、ちなみに同じ会社の船にも染殿丸とか、織殿丸とか、宮殿丸などえらく優雅な船名があつたので、なんとなく納得したものでした。

さて、私が乗船してからの一年余りは、主としてルソン島のバラナカ

ンやバラカレ、マレー半島のヅングンなどで鉄鉱石を積み、八幡や広畑に運んでいたが、たまにはタイのコーシチャン島で米を積み、大阪に揚げたこともありました。

昭和十六年の夏になると、次第に世間が騒然としはじめ、船内でも御用船への徴用の話が取沙汰されるようになったが、その頃は日米関係がかなり険悪になりつつあつたとはいえ、あれほどの大戦争が起こるとは夢にも思はず、ただ日華事変のための徴用船だとばかり思っていました。だから、時にマニラ沖を航海しているときなどデッキの手摺にもたれて、あの遙か向こうのコレヒドール島には米軍の大要塞があり、そこには物すごくデッカイ大砲があつて、もしもアメリカと戦争するようなことがあれば、ドラム缶ほどの弾丸が飛んでくるそうなどと呑気な笑話をしたものでした。事実、あとで太平洋戦争が勃発してから、この要塞が頑強に抵抗したことも戦史上明らかです。

ところが噂の通り、その年の十月頃になって、本社よりの暗号電報で、呉竹丸の陸軍御用船への徴用が決定されたので、揚荷後は宇品港に回航するよう指示があつたのです。それでも太平洋戦争の勃発など思いもよらず、ただ中国大陸への輸送船に徴用されたのだからうぐらいに軽く考えていました。それからは船内でもいろいろな噂話でもちきり、かつて御用船として従軍したことがある先輩達が、得意気に杭州湾の敵前上陸やカムラン湾への兵員輸送の体験談を語るのを、恐ろしいような勇ましいような複雑な気持で、熱心に耳を傾けたものでした。

さて、船が宇品港に到着してみると、すぐく沢山の船が将棋の駒のように整然と似ノ島の沖合まで錨泊しているのに二度ビックリ。そこで初めてひどい緊張感にとらわれたのでした。それから数日を出ずして船艙や下部甲板の改装が行われ、臨時船員や見張員が三十名ほど乗船して

きて、兵糧秣、炊事食器類が大量に積み込まれ、船体や船室の外壁も全部濃い鼠色に塗られ、そして船首には敵潜水艦を威嚇するために、実物大の木製の模型大砲をグレー色にペンキ塗りして、それらしく据え付けたのも今から思えばまったく笑止千万の沙汰でした。

やがて、昭和十六年も十一月になると日米間の外交関係がますます悪くなり、ついにはもしかすると日米戦争が起るかもしれないと、世の中はあげて、超非常事態であるという考えがすべてを支配しはじめたのです。そして、とうとう十一月半ば頃になって、呉竹丸に出航命令が下り、門司港で兵員を搭載したあと上海に向け出港せよ、ただし、最終目的地は船長に渡してある指令封書に記入してあるので、出港後一時間あたりに開封してその指示に従えというものでした。そのころすでに陸軍では日米開戦不可避とみて、これに間に合わせるため南方方面の攻撃準備をはじめていたのだが、敵のスパイを欺くため、あくまでも中国大陸への兵員輸送だと思わせる陽動作戦だったようです。

この指令で船はただちに門司港に向かい、税関岸壁に着岸して約二千人に及ぶ多数の兵士を船腹一杯に満載し、同時に後部の船艙には多数の軍馬が搭載されたのでした。この乗船の将兵達は、かのシンガポール電撃作戦で勇名を馳せた坂口兵団の一部隊で、たしか仙台師団所属だったように覚えています。特に呉竹丸には軍旗が乗船したので、まずそのいかめしさに驚かされ、続いて乗船する兵士達は、軍装りりしく戎衣ゾウイも銃もピカピカで、勇気りんりん精鋭そのもので、まさしく無敵陸軍と呼ぶにふさわしい立派なものでしたが、これが後年マレーよりの転進後の南方戦線で、飢餓と病魔におそわれたあの悲惨な結果になろうとは、神ならぬ身のだれも予想できなかったことでした。

前部の船艙一杯に二段に作った蚕棚に、ぎっしりと兵員をつめこんだ

呉竹丸は、出港後に指令書を開封してみると、行先はコロル島バラオ行きとあるのにまず驚きながらも、ついに来るものが来たかと南方に転舵し、一路南下して行つたのです。途中は灯火管制や之字運動航法など訓練しながらも、まだ戦前のこととて至極呑気な航海を続け、やがてバラオ湾に入り、山かげに投錨したが、そこにはすでに他にも数隻の船が兵を満載し、静かに待機しており、ヒッソリと身をかくし、ちょうど古語にいう枚をふくんで満マツを持し、次の出動命令を待っているという感じでした。

ついに運命の日、昭和十六年十二月八日朝の大本営発表のニュースに、かねて覚悟はしていたもののついにやったかという緊張感が船内一杯にみなぎっていったが、いよいよ戦争ともなれば、潜水艦や飛行機の攻撃は必ずあるし、これから先どこまで行くのか、いつまで兵員輸送を続けるのか、前途を考える時、一抹の不安がやがて胸中に雲のように湧いてくるのでした。

#### ダバオ攻略

軽巡洋艦神通ほか三隻の軍艦に護衛嚮導されたわれわれの船団は、兵団長を乗せた帝海丸を中心にして、十二月八日夜半、バラオを出港してミンダナオ島ダバオ湾に進入していききました。すでにそのころは、ダバオの街は海軍陸戦隊によって占領されており、埠頭付近は爆撃と砲撃で瓦礫の山と化していました。

ダバオ沖に投錨した輸送船からは、残敵掃討のために将兵が続々と大発艇で陸岸に送りこまれ、遠方で砲声や機関銃の音がかすかにひびき、ときどき山の方で赤い信号弾が上るのが望見された程度で、戦争という実感にはほど遠いような気がしたものです。

それでも碇泊中のある日、突然大音響と大きな水柱が船のまわりに続いて起こり、何事かと驚く間もなく敵機の来襲と知って、一時はきもを冷やしたものの、すでに敵は遙か上空を遁走してしまいました。ダバオでの一週間ぐらいの碇泊中に、ふたたび将兵が船に帰ってきたが、皆それほどの戦闘をやったような疲労はみえず、我々はただご苦労さまでしたと心に思いながら甲板上に昇ってくる兵隊達を眺めていたのです。

### ホロ島の夜襲

ダバオを平定したわが部隊は、数日をいですべて続いてバラワンのホロ島に進撃し、夜襲をかけて、頑強に抵抗する擽猛なモロ族を掃討して、多数の武器とくに特有な長柄の頭丈な槍を大量に捕獲して甲板上に積み上げていました。この夜戦で、門司より乗船し隣の部屋にいて親しく挨拶をかわしていた若い少尉副官が、暗夜のなかで藪の中からの槍の一撃をうけ、ついに戦死したとの報にしばし暗然とし、はじめて戦争というもののきびしさを思い知ったのです。

この戦いのなかでわが部隊は、ホロ島の英蘭銀行も襲い、その地下室にあった金貨やペソ紙幣の一杯つまった蜜柑箱大の鉄箱二個を押収し、事務長室の床の上にデーンと置いてあるのを見ましたが、この作戦が終わるボルネオ島バンジュールマシンの敵前上陸が成功すれば、記念として幹部職員に金貨を一枚ずつ贈呈することだったそうだが、それもついに船と一緒にバリクパパンの海底に沈んでしまいました。

### タラカン攻撃

特徴のある三本煙突の軽巡神通を旗艦とする海軍艦艇に護られなが

ら、次の作戦はタラカンの油田地帯を占領することでした。

一月初旬のある日の夜半に、船団はしゅくしゅくとタラカン沖に侵入接近したのですが、そのころはすでに海軍陸戦隊が敵前上陸を敢行して橋頭堡をきずいており、やがて陸軍部隊が上陸したあとは、遙かかなたに油田の火災の炎が夜空を焦がしている光景が見られました。

後日談として、タラカンの要塞司令官のオランダ軍大佐はかねてより日本軍の攻撃を予期しており、いざというときはタンクの油を島の海峡に流しこみ、これに火をつけて日本軍の進攻をさまたげる作戦をたてていたのだが、日本側のすばやい奇襲のためそれも間に合わず、火ぜめ作戦が不可能になったとききました。やがてこの敵司令官もついに降服し、副官と共にわが船団の帝海丸に捕虜として収容されているのをあとで目撃しました。

また余談として、進撃部隊の某少佐参謀の発案で、ダバオから一人の現地人を陸路タラカンに潜行させて、タラカン海峡の入口で目印の火をたくように命令し、それが成功したときは多くの褒賞を約束すると同時に、現地人の逃亡をふせぐために、その妻を人質にとって同じく帝海丸の船艙に収容しているのも見たが、せっかくのこの名案も、肝腎の現地人が逃亡したため不成功に終わったようでした。

やがてこの作戦もわが方の一方的な勝利のうちに終わり、いよいよ次はボルネオ島バリクパパンの敵前上陸を決行するための作戦準備がはじまったのです。

### バリクパパンでの沈没

このところ、南方の気象としては珍しく、毎日のように雲の多い天候が続いていたのだが、これがのちほどの作戦に大きな影響を与えたので

した。ボルネオ攻撃はいままでと違って、かなり慎重に作戦計画がねられたようです。それというのもバリクパバンは蘭領ボルネオの要所で、かなりのオランダ軍が駐留しており、これが頑強に抵抗するに違いないとの見方が強かったからです。作戦開始前には、わが海軍偵察機が数度にわたりくわしくバリクパバン一帯を偵察したのだが、あいにくの曇天とスコールのためか、バリクパバンを流れる河の上流奥深く巧妙にカモフラージュされた一隻の砲艦と、一隻の潜水艦がいたのを見落してしまつたのでした。

神通ほか数隻の艦艇に護られた陸軍輸送船団と、他に数隻の海軍輸送船を含む大船団は、いよいよ一月二十三日の夜半、バリクパバン沖に接近していき、最後の突撃命令とともに各船全速力で湾内に突進していきました。呉竹丸も意気さかんなりとはいえ中古船のかなしさ、エンジンのクランク音をいまにもこわれそうに響かせながら、緊張のしじまの中をこれ以上どうしようもないという十一マイルの速力で、ふうふういながら夜光虫の青白い尾を引きつつ他船のあとを追いかけていったのでした。恐れていた敵の抵抗もなくなるとか湾内の突入に成功して投錨すると、かねて準備していた先発部隊は、サイドにたらしした網をつたって暗夜の中を銃剣の音をひびかせながら大発舟艇に続々とおりていった。先発隊の下船がしばらく続き一区切りついたあとは、後続部隊と輜重隊が次の上陸開始を待っており、遙か前方の黒い陸影にはあちこちに信号弾が打ち上げられ遠くで機銃の音がけたたましくひびいていました。

どうやら敵前上陸は成功したらしい、これでやれやれだなと一息入れたとき、突然「ドドン」と大音響とともに船体が激しくゆれたのでした。あっ、どうしたのだ、敵襲か、何があったのだ、船内はたちまち蜂の巣をつついたような大混乱に落ちいった。

「船の後部に魚雷が当たった！」というだれかの叫び声に、無線室に走りこんだ通信士は、かねて打ち合わせ通りの陸軍暗号で被雷状況を付近の船に通報したが、そのころは、すわやられた、救命艇の降下だ！

甲板員はワッシュイワッシュイとボートを船側に押し出すのに一所懸命、なにしろ救命艇の降下装置だつて現在と違って旧式のもので、力でやるよりほかはない。やつと艇が船のデッキと同じ高さきたときは兵隊がわれ先にと軍装のまま乗りこんでくる。「待て、まだ乗るな」と声をからして叫ぶ船員の制止もかまわず次々と乗りこんでくる。途中でロープがブロックにからまってどうにもならなくなる。「切れ、切れ」の声に、一将校が軍力を抜いて片方のロープを一気に切断したからたまらない、救命艇はバランスをくずしてアツという間にまっさかさまになり、乗りこんだ兵隊達は豆がこぼれるように海中に落下して行った。

雷撃された後部船艙をのぞいてみると、ゴーという浸水の音も恐ろしく、枠につながれた多数の軍馬がヒヒーンと声高いなき、助けを求めてひずめでドドウと床をける音はいまもかなしく耳に残っています。そのあいだも、刻々と船は船尾から音をたてて沈んでゆく。救命具を身につけて走り出たとき、夜空にダダーンという敵味方軍艦の砲声がかたまし、すぐ近くを一隻の軍艦が走り抜けて行く。ピューンピューンという銃弾の音が紫や黄色の曳痕とともに甲板上をかすめて、思わずデッキに身をふせる。

このとき、オランダの砲艦と潜水艦が、こちらの意表をついて、暗夜のなかをあたりかまわず銃砲雷撃しながら船団のあいだを抜けて遁走したのだった。

前部甲板では残った兵隊達が、飛び込め飛び込めと声高に叫んでおり、軍装のままの兵隊達は、舷門から飛び込んだ者に続いて同じ場所か

ら、先に飛び込んだ者の頭上もかまわず申し合わせたように続いてドブ  
ンドボンと飛び込むのです。軍装をといて、別の場所から別々に飛び  
込むなどということは、軍隊訓練が身につけていてどうしてもできな  
かったのだろう。

船が沈むときは、大きな渦巻ができてまわりのものを引き込むと先輩  
からかねて聞いていたので、大急ぎで船から百メートルも離れたころ、  
呉竹丸は船首を上にあげて、のたうつ巨鯨のように大きなしぶきをあげ  
ながら海中に没していった。

どのくらい泳いだろうか、南方の海といえ夜間はかなり冷たい、だん  
だんと体が冷えこんでくるのがよくわかる。周囲の五、六名の人達と離  
れないように声をかけながら泳いでゆくが、次第にばらばらになってゆ  
く。とにかく陸の方角に向かって泳いでいれば、そのうち助かるだろう  
と頭張っていく。そろそろ夜明けも近いだろう。海に飛び込んでからど  
のくらいになるだろう。ずいぶん長い間泳いでいるような気がする。救  
命具が首をしめつけて苦しい。人喰い鱧はこのへんにはいないのだろう  
かと思うと身がすくむ。

突然、うす暗い中をオールの音が聞こえてきて「オーイ、オーイ」と  
呼ぶ声がある。闇をすかして目をこらすと波の向こうに一隻のボートが  
やってきてまわりの者達をすくい上げている。「オーイここだ、ここだ」  
と叫ぶとやがて近づいてきて引っぱり上げてくれた。やれやれこれで助  
かったと急にぐったりしたが、この間ボートの漕手はなぜかしじゅう無  
言だったが、どうも海軍の兵隊らしかった。やがて夜が明ける頃、救命  
艇は海軍徴用船の稲荷山丸に横付けされて、われわれ数人はこの船に収  
容されたのです。

その翌日になって、呉竹丸の生存者は帝海丸に集合せよとの連絡で、

差し向けられた舟艇で私達三、四名が帝海丸に乗船すると、別々に救助  
された船長以下全員が一名の負傷者もなく揃っており、再度の会合に皆  
大喜びで、よかったよかったと救助された経緯を語り合ったものでし  
た。そしてこの戦いで、社船の辰神丸ほか三隻も敵の攻撃で沈没したと  
いうことも知ったのです。

二、三日後に全員が陸上の宿舎に移り、そこで二週間ぐらいすごした  
あと、再び陸軍輸送船の鶴崎丸に移乗して、途中敵潜の攻撃におびえな  
がらもバラオ経由で宇品港に無事帰投できたのです。ときに昭和十七年  
二月二十八日でした。

私はこの大戦中に五回にわたり、呉竹丸、辰鳳丸、染殿丸、辰寿丸、  
喜春丸と遭難して幾度となく生命の危機にさらされたが、同じ船で武運  
拙なく殉職された多勢の先輩諸兄のことを思うとき、心の底から哀悼の  
祈りを捧げてやみません。